

事科事皆回りぬり也。傳人飽海郡島原の禁氣
田目村の島原の飯のうらまは坂の形斗のうらまは
八幡宮と云ふれり。と伝へり。吾ち物事の社司を宮に部
を輔へり。その意田目村の古城を姫岡郡の町
を城とす。古事記に藤原部と云ふ。其後高又
なり。又を城と云ふ。他の意は海に必災なり
と云ふ。予按るに多主成り。と云。佐賀と云ふもの
忽接のく。と云。吹浦と云ふもの。神社社家と云。古代雄
河院。寛治年中。八幡と云。新家公。東夷征伐之時。祈勝

於大物忌大神終勝敵。於是帰陣之日。使侍臣須藤
某。殘留奉仕大神。後移之。曰。留主殿。上下如斯。可
又土俗の云。飽海郡北目村。新田主と云。是。新田
目村。又別り。と云。吹浦の社。内。淺倉。と云。伏見

出羽國兩所宮修造之。更不終。其功之由。神主之永
新中之間。去建保六年十二月。為倭寇。皇被遣。難
色正家。故大臣殿御大事。出見候間。中家不遂。其
節。歸参。然而有限。修造。依不可。默止。為。遣使。所被
指遣。新色。直克也。無懈怠。可終。其功之伏。依陸奥